

アケビスプラウトの遮光栽培

福島県林業研究センター 林産資源部

部門名 林業

担当者 手代木徳弘

I 新技術の解説

1 要旨

中山間地の継続的な林業収入に占める山菜等の売り上げは大きい。原発事故以降山菜類の売り上げは低迷しており、商品力のある新しい山菜類の開発が待たれている。アケビの新芽は長野や新潟を中心として野生採取のものが食用とされているが、苦みが強いことが一般化しない理由ともなっている。アケビスプラウト（実生由来の新芽）の栽培を試みたが、自然光下では3cm程度で木化し食用に適さなかったため、遮光栽培を試みたところ、野生種に比べ可食部長が大きく、ほろ苦くスプラウト独特の歯切れの良い食感の新たな山菜品目が生産できた。

(1) 種子の入手のため6本の苗木を直径3m高さ2mのドーム状のアルミフレームに植栽し、採種園として植栽3年目には1ドームあたり100個程度の果実を得ることができた(図-1)。一つの果実からは100~400個程度の種子が採取できた。

(2) 採取した果実から種子を分離し、蒔床に播種した。播種は種子採取後ただちに実施することが望ましいが、保存する場合は種子と同量程度の濡れた砂と共に密閉袋に入れて冷蔵庫(4~7°C)で保存すると2~3ヶ月程度の保存は可能である。

蒔床は苗箱(25×35×5cm)に鹿沼土細粒を4cm充填したものとし、筋状に4列200粒を蒔き付けた。覆土は種子が隠れる程度と極力浅くし、表面が乾燥しない程度に週2回程度灌水した。暖房設定15°C、換気設定25°Cのガラス温室内で管理した(図-2)。

令和3年9月30日に播種したところ令和4年1月19日に発芽を確認し、遮光装置を設置した。遮光装置は木製で苗箱が隙間無く収まるサイズ(26cm×36cm×35cm各内寸)とした。遮光栽培中のカビ発生防止のため、送風機(シロッコファン0.04kw 20分岐)とホース(φ19mm)により常時送風を行った。送気は遮光箱垂直面上部1箇所から行い、排気は遮光箱垂直面両側下部1cmに穿けたφ12mmの穴から行った(図-3)。

(3) 発芽7週目から10週目まで各3箱を収穫し、収量等を確認した(図-4、表-1)。9週目が収量、可食部の大きさが最大となった。10週目は地上部が堅くなり始め、食味が悪くなったため、収穫は発芽後9週が最適であることがわかった。

II 具体的データ等



図-1 アケビ採種園



図-2 スプラウト発生状況



図-3 遮光栽培装置



図-4 アケビスプラウト

表-1 育成期間ごとのアケビスプラウト収穫結果(1箱あたり、各週 n=3)

育成期間	平均可食部長cm	平均収穫重量 g	平均可食部重量 g	平均30本重量 g	平均本数
7週間	10.33	23.88	14.81	3.12	147
8週間	12.17	27.32	18.05	3.47	158
9週間	12.33	28.90	18.47	3.55	165
10週間	11.50	23.33	14.78	3.52	131
総平均	11.58	25.86	16.53	3.42	150

2 期待される効果

- (1) 新たな山菜品目として生産が期待できる。

3 適用範囲

- (1) 県内の各地。

4 普及上の留意点

- (1) 温度管理ができる施設があれば栽培可能。
- (2) 鮮度を保つ梱包出荷方法等の工夫が必要。

III その他

1 執筆者

手代木徳弘

2 成果を得た課題名

- (1)研究期間 平成30～令和4年度
- (2)研究課題名 山菜類の選抜と栽培方法

3 主な参考文献・資料 なし